

三河本苑だより

9月号

2021・9 No.472

(発行者)

大本三河本苑

〒443-0031

蒲郡市竹島町28-5

TEL.0533-69-7518

FAX0533-69-1455

令和3年秋季大祭奉納冠沓句の募集

【冠句題】

- ・ 現界の
- ・ 清らかな
- ・ 現(表)れた

【沓句題】

- ・ 驚いた
- 【×切】9月19日(日)
- (本苑9月月次祭)
- ※1人5句まで 芸術部

9月の行事

●19日(日)

本苑九月月次祭

・ 敬老会

●26日(日)

宣伝使・宣伝使に

なるための研修会

10月の行事

●17日(日)

本苑秋季大祭・

祖霊慰霊大祭

・ 奉納冠沓句

・ 記念講話

神の家新築工事上棟祭を終えて

神の家建設委員 河合恭久



上棟祭「工匠式」槌打の儀



上棟祭「工匠式」槌打の儀

快晴に恵まれ八雲
琴の音色の中、上棟
祭が始まりました。
大神様、産土の大神
様のご守護をいただ
き修祓のお祓いの音
が耳にやさしく響く中、
「巻雲棚(けんうんた
なびき野も山も緑深き
此(これ)の美(うらわ)
しき三河の里蒲郡竹
島の真保良(まほらば)
を祓い清め神籬(ひも
ろぎ)設備(つくりも
う)けて」と皆様の
真心と共に、工事の安
全と無事完成出来る



上棟祭「上棟祭祝詞奏上」

ようにと祈願させて頂きました。
その後、亀山建設社長自ら司会
のもと、尾張藩の作事方(さくじ
がた)へ大工方(おおこう)伊藤平左衛門氏の
やり方による工匠式(こうしき)しょう
しき(は)は始まりました。
寿詞文(じゅじもん)を工事責任
者の村瀬氏が奏上され、無事建て
られますようにと大本皇大御神、
産土の大神様に祈願されました。
次に曳綱(ひきつな)の儀に移り、尾
根より紅白の綱が降ろされ、大工さ
んの「エイ、エイ、エイ」のかけ声と



上棟祭「工匠式」曳綱の儀

共に、参拝者皆で引かせていただき、
無事棟木(むなぎ)を上げる行事が
出来ました。槌打ちの儀に移り大
工さんのかけ声の中、棟木が打ち
おさまる音が鳴り響きました。
最後に散餅(さんぺい)の儀に移
り、四隅から紅白の餅が落とされ
(まよけ)行事が終了しました。
その後、大神様、産土の大神様、
祓戸四柱大神様にお帰り頂き上棟
祭は終了しました。
祭典後、前田特派、野田相談
役、亀山建設社長亀山直央氏より



本苑長 挨拶

暑い中ご奉仕いただいた
祭員、伶人、司会、亀山建設
の方々、ご参拝いただきま
した特派、相談役、機関代
表の方々また準備、お手伝
いをしていただいた役員のご
協力も、無事上棟祭を終
えさせていただきました。あ
りがとうございました。

50年記念誌の進捗状況

編集推進責任者 牧 武

令和3年新年ご挨拶の中
で、加藤本苑長は、「令和4
年三河本苑設立50周年に
向けて2つの記念事業（神
の家建設・記念誌発行）
を進めていきたいと思います。」
と述べられました。

皆さま既にご存知の通り、
「神の家の建設」は7月24
日に上棟祭を無事執行い
たしました。本来ならば、
皆様とご一緒にお祝いし
たかったのですが、時節
柄それも叶わずもう少し
の辛抱です。完成の暁に
は是非とも大勢の方と喜
びをともにしたいと思っ
ております。引き続きよ
ろしくお願いいたします。

【50年記念誌のページ一例】



あり併せて、「先人の『苦労』
を生んで残すことも同様に
主たる目的であります。ま
た、「神の家建築の経緯を語
る」ことがもう一つの大きな
目的であります。今までの
改築、増築の歴史を含めて、
今回の新築に至った経緯も
紹介させていただきます。

編集委員会の活動も皆さま
のご協力のおかげで「記念
誌発行」の第2段階に入っ
て参りましたので、現在の
状況等についてご紹介させ
ていただきます。

【発行目的】

20年誌以降の「本苑活動
の歩み」を後世に記録とし
て残すことが1番の目的で

そして、10年後に向けた
「本苑活動のありたい姿」
を示すことが最後の目的で
あります。

【作成の方針】

20年誌では「三河本苑の
歴史」を本部で指導のもと掲
載させていただき、40年誌
では、「大本信仰とみ教え」
を主に作成されていきました。

【神の家新築のページ一例】



今回の50年記念誌では、
20年以降の歴史的資料が
乏しいため、三河本苑の歴
史を参考に年毎の文章・写
真。キャプション・コメン
ト等で構成されています。
また、50年記念誌を
家族でご覧になり、会話が
生まれ「後継者」また『大

和合』ができることを願い、
出来るだけ多くの信徒の皆
さまのご神業風景を掲載
させていただきまます。（一人
ひとりが主役）

【年誌の構成】

- ①表紙「信徒とともに神業・報恩感謝・変革の10年」（仮題）
- ②本苑長、相談役あいさつ

- ③本苑設立から40年までのご親教
- ④平成25年から令和4年のメイン行事を掲載
- ⑤「信徒ヒストリー・あの時、あの人」として、各ページに活躍された方の写真とコメントを掲載（20名程度）
- ⑥新しい神の家建築経緯
- ⑦新しい神の家建設写真（取壊し・基礎工事・地鎮祭・上棟祭等）

※現状は此処までが出来上がっています。

【年誌の体裁等】

- A4、オール4色カラー（写真点数400〜500点位）全中身52ページ（予定）

冒頭のあいさつの最後
に、加藤本苑長は「新しく
立派に建った神の家で、本
苑活動の歩みを記念誌で振
り返りながら、50周年記
念秋季大祭を迎えたいと思
います。」と話されていま
す。引き続き「大和合」で
よろしく願っています。

「人相とその性質」後編

「神の国」大正 15年2月

特任宣伝使 松永孝司

目の奥深いのは智慧の深い証拠である。こういう目の持ち主は内流が強いから、深くおもんばかりで事を処するから間違いが無い。目の飛び出ている人は、ちょっと目先が利いて、利口そうに見えるが、外部状態をのみ見る人で奥がない。こういう人に阿呆が多い。茶色目の人は長生きをする。性質が清廉潔白で、道徳心強く、自製の念が深いから、情欲のために失敗を招くことはない。黒目がちの人は、見たところ綺麗だが、性欲が強く、情事のために身を危うくするおそれがある。男の目は細長い一重目がよい。丸い目は悪相である。女は二重目のぱっちりとした丸いのが円満を表象してよい。女の細い目は淫乱な相である。「女の目には鈴を張れ、男の目にはしんしはれ」との諺はほんとうである。三白眼は根性の悪い証拠。私（聖師）の目は、ぼんやりしていて、時に鋭く光ると人がいう。見るがごとく、見ざるがごとくうちに人の心を読む。

額は広いほどよい。狭いのは貧相である。頤（あご）の四角張ったのは悪相、下頤のしゃくったように出ているのは「でれ助」で軽率な人である。かん骨（ほほばね）の秀でたのは善い相で、鼻の下の長いのは、世間でいう通り馬鹿の象徴だ。眉は三ヶ月が最上で、少し下にながったのがよい。上に向いているのは陰悪な相である。毛虫のような眉はことによくないのである。

連載 大本ごぼれ話